漢法苞徳塾資料	No. 016
区分	診断・望診
タイトル	運動診について
著者	八木素萌
作成日	1993.02

【1】問題の所在

◎疾病と経絡

『経絡学説』によれば、あらゆる疾病は経絡体制の上に反応を現わしている。

その現われ方は

- 〈a〉外感病の場合には、「外から内」「表から裏へ」という伝変の原理に従って「経病」段階から始まる（皮部—絡部—経脈などの広い意味で）。
- 〈b〉内傷病の場合には、「内のものが外に反映する」、治って行くときも「裏から表へ変化して行く」という原理に従った表現様式となる。
- 〈c〉不内外因による疾病の場合には、障害が生起している部位の経脈に反応が現象する。

これらの変化伝変の様式となる主要な身体的体制として経絡体制がある、疾病と経絡体制は切り離すことができないものである、と把握されている。

『難経』三十七難に「邪が六腑にあれば、陽の経脈の働きが調和を欠くようになって、気がそこに停滞して、その経脈が盛になる、また、邪が五臓にあれば、陰の経脈の機能は調和を失い、そこには血が停滞して、陰の経脈が盛になる…」ことが記述されている。

『靈枢』経脈第10は、全身の経脈の流注を記述し、病証も記述しているが、その流注に沿って「支」（つかえ）（運動障害？）や「痛」が現われることを記述している。『素問』調経論第62には、「…五臓之道・皆出於経隧・以行血氣・血氣不和・百病乃变化而生・是故守経隧焉…」〈五臓ノ道ハ皆経隧ニ出デテ以テ血氣ヲ行グラス、血氣和セザレバ百病スナワチ变化ニヨリテ生ズ、是ノ故ニ経隧ヲ守ルナリ〉と記述されている。

◎疾病の体表への反映とその多層性

『黄帝内経靈枢』九鍼十二原第1に「…今夫五臓之有疾也・譬猶刺也・猶汚也・猶結也・猶閉也…」〈今夫レ五臓ノ疾ノアルヤ・譬レバ刺サレルガゴトキナリ・汚ルルガゴトキナリ・結ボルルガゴトキナリ・閉ザサルルガゴトキナリ…〉と記述されているように、疾病は、経脈機能の異常として現われ、気血の流注に停滞を来たすので、此処に表現されているような種々の体表での現象を見せている訳である。これらの反応は、経絡上や「ツボ」上に顕現することが認識されている。

最近の「鍼灸における『証』について」を主題とした『日本経絡学会』の討論の過程で、この経絡・経穴の上に顕現される反応は、多階層的なものであることが指摘された。

この多層性には、

- (A) 病因の五行性を示している反応、
- (B) 病んでいる臓腑・経絡を示した反応、
- (C) 季節性の体調を現わしている反応、
- (D) 体質・素因・ライフスタイルなどの表現と見られる反応、
- (E) 病理的産生物〈瘀・飲・痰など〉に対応した表現である反応、
- (F) 子午・運氣による経脈・経穴の開闔を示している反応、
- (G) 経脈の走行部位（支配領野）における皮部・経筋などの変動に関連した反応、などが存在している。

それらを、そのまま立体的・層的なものとして把握して、そのような反応の生理的・病理的な意味合いを解釈できなければ、診断は成立しないことになる。

- ◎あらゆる疾病は経脈上に反応を現わし、経脈の変異は「気血の流注」の停滞となっているので、そこにおける「支え」「痛」が顕現されることは、運動時の違和や異常から変動している経脈を把握すると言う、診察法の問題を提起している。

【2】運動診に関する古典における記載例若干

- ◎『素問』刺腰痛第 41 に、例えば「…陽明令人腰痛・不可以顧・顧如有見者・善悲…」〈陽明人ヲシテ腰痛セシメテ以テ顧リミルコト可ナラズ、顧リミテ見ルコト有ルガ如キトキハ善ク悲シム〉、「…腰痛上寒・刺足太陽陽明・上熱・刺足厥陰・不可以俛仰・刺足少陽…」〈腰痛シテ上寒ナルハ足太陽陽明ヲ刺ス、上熱ナルハ足厥陰ヲ刺ス、以ッテ俛仰スル可カラザルハ足少陽ヲ刺ス〉、「…腰痛上寒・不可顧・刺足陽明・上熱・刺足太陰…」〈腰痛シテ上寒ク顧リミルベカラザルハ足陽明ヲ刺ス、上熱アルハ足太陰ヲ刺ス〉、「…腰痛引少腹控眇・不可以仰…」〈腰痛シ少腹ニ引イテ……〉
- ◎『素問』逆調論第 34 には、「…榮氣虚則不仁・衛氣虚則不用…」〈榮氣虚スレバ仁ナラズ、衛氣虚スレバ用イラズ〉があり、『靈樞』経筋第 13 には、「足太陽之筋…其病小指支・跟腫痛・膕攣・脊反折・項筋急・肩不挙・腋支・缺盆中紐痛・不可左右揺…」〈足太陽ノ筋…其ノ病・小指支エ・跟腫痛シ・膕攣シ・脊反折シ・項筋急シ・肩挙ラズ・腋支エ・缺盆ノ中ハ紐痛シ・左右ニ揺スルベカラズ…〉や、「足少陰之筋…其病足下転筋・及所過而結者皆痛及転筋・病…在外者不能俯・在内者不能仰・故陽病者腰反折不能俯・陰病者不能仰…」〈足少陰ノ筋…ソノ病足下転筋シ・過ギル所ニ及ンデ結ボルル者ハ皆痛ンデ転筋シ…病外ニ在ル者ハ俯ムコト能ワズ・病内ニ在ル者ハ仰グコト能ワズ・故ニ陽病ハ腰反シテ俯ガムコト能ワズ・陰病ハ仰グコト能ワズ…〉とか、「手陽明之筋…其病所過者支痛及転筋・肩不挙頸・不可左右視…」〈手陽明ノ筋…ソノ病過グル所ノ者支エ痛ミ及ビ転筋シ・肩頸ニ挙ガラズ・左右ニ視ルコト不可ナリ…〉など等のように、十二経筋の全てについて、その病証を記述しているが、これらは運動診を体系化しようとする場合の重要な示唆に富んでいる。

◎『素問』離合真邪論第 27 には「…夫邪之入於脈也・寒則血凝泣・暑則氣淖沢・虚邪因而入客亦如經水之得風也・經之動脈・其至也・亦時隴起・其行於脈中循々然…」〈夫レ邪ノ脈ニ入ルヤ・寒キトキハ血凝泣シ・暑キトキハ氣 沢トス・虚邪ノ因ニシテ入り客スレバ亦經水ノ風ヲ得タルガ如キナリ・經ノ動ズル脈タルヤ其ノ至ナリ・亦時ニ隴起ス・其ノ脈中ヲ行グルコト循々然タリ…〉とあり、『素問』太陰陽明論第 29 には「…帝曰・脾病而四支不用・何也・岐伯曰・四支皆稟氣於胃・而不得至經・必因於脾・乃得稟也・今脾病不能為胃行其津液・四支不得稟水穀氣・氣日以衰・脈道不利・筋骨肌肉・皆無氣以生・故不用焉…」〈…帝曰ク・脾病ンデ四支用イラズトハ何ゾヤ・岐伯曰ク・四支ハ皆氣ヲ胃ヨリ稟ケテ經ニ至ルコトヲ得ザレバ・必ズ脾ニヨリテ乃ワチ稟クルコトヲ得ルナリ・今脾病ンデ胃ハ其ノ津液ヲ行グラスコトヲ為ス能ワズ・四支ハ水穀ノ氣ヲ稟クルヲ得ズ・氣ハ日ニ日ニ衰ウルヲ以テシテ・脈道不利ナレバ・筋骨肌肉ハ皆氣以ッテ生ズルコト無シ・故ニ用イラザルナリ…〉と云うのもある。

【3】日本における運動診の提起

◎伊藤修氏法……圧痛と運動時の違和乃至は運動痛により奇経の変動を診た。

丸山莊平氏法（中島奇経）……頸項（くび）の運動時の違和ないしは発痛によって変動している奇経を判断した。

その他……時任氏・城戸氏ほかの少なからぬ臨床家は、特には発表していなくても、また、必ずしも体系的とはいえずとも、経脈の変動を把握しようとして、運動時の違和感や発痛や引きつれ感などに着目している。これらは、収集されて体系的に整理されるならば、臨床に大きく貢献することになるであろう。（別資料参照のこと）

☆これらは『靈枢』経脈第 10 の記述〈特に陽経脈に関しては、病の場合にはその経脈が流注している部位に痛みや動かしにくさ等が生じる、ことを記述している〉が臨床家に積極的に活用されていることを示すものである。

【4】若干の提案

◎幾つかの系列を組み立てて、『運動診法』の体系的な構築は可能である。つまり、身体を運動させる時に、系統的に体系化した方法に従って運動せしめて、その折に生起する、「違和感」「牽引されてひきつれる感じ」あるいは「発痛」や「動きが異常であるかどうか」などを診て、変動している経脈を判定するのである。

A. 経絡の走行部位を過伸展にする

[1] 自動的に行なう姿位

〈イ〉いわゆる経絡体操

〈ロ〉近年大いにもてはやされている内気功の姿位には、某経絡を意識的に伸展することを、全身的に一定の運動順序で、気功操作を行なっているので、この内気功の姿位。

〈ハ〉ストレッチング体操の全姿位は、伸展される筋肉部位と経絡の走行との関連を検討して、運用できるので、ストレッチング体操の全姿位。これらは重要なヒントやアイデアを提供している。また、自動的な運動によって、変動している経絡を把握して、これの調整を図ることは、保健・健康のために極めて有用である、とすることができる。

[2] 他動的に行なう姿位と方法、

〈イ〉上の自動的に行なう姿位を研究・分析して、他動的に、経絡走行部位を過伸展の姿位状態にするための、複数の技術的タームを体系的に用意しておく必要がある。それは他動的な操作によって判定しなければならない場合には、

{ a } 自動運動による判定法と相互補足的である場合、

{ b } 治療の際の経絡の変動の把握方法の一環としてベッドサイドで行なう場合

{ c } 重督な患者の場合には、他動法を用いるよりほかにない場合がある、

この場合のことを考慮すれば、複数の操作パターンが用意されて置くことと、患者に負担をかけないように軽い操作で、主要な変動経を（この場合には、治療的に運用する主要な経を求める場面が考えられる）判定できるようにすることが必要になるだろう。

B. 無意識的な生活姿位の分析

C. 重要な関節径や角度を、動作分析したり計測して、その結果を帰納し分析し総合し推論したりして判定する

D. 閉目起立反射の分析による判定

E. その他にもあるだろう。

【5】研究方法の問題

- A. 基本的な古典医書の記述から、この部分を可能な限り広範に、拾い出して、体系的に整理する作業。
- B. 臨床家が実行しているものを可能な限り収集して分析整理して体系化する作業。
- C. 臨床観察の体系化と集積、それらの分析と整理の作業。
- D. 以上の情報のデータのデータベース化の作業。
- E. 臨床的適用と、その効果の分析と整理およびデータベース化の作業。

などなどであろう。

大学が、国家からの特別な研究費用を得て、系統的な研究を進めて欲しいものである。